

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

## 〈日本語解説〉「インド・コルカタの華人・客家研究をめぐるレビュー分析」

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-03-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 河合, 洋尚 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15021/00009526">https://doi.org/10.15021/00009526</a>

## 〈日本語解説〉「インド・コルカタの華人・客家研究をめぐるレビュー分析」

序論で触れたように、「南側諸国」の客家研究のなかでインドは相対的に研究蓄積が多い研究対象地である。この論文は、まずインドの華人および客家をめぐる先行研究、特に1960年代以降の西ベンガル州コルカタ（旧称：カルカッタ）をめぐる研究をレビューしており、そこからインド客家社会の変遷についてのデータを提示している。本稿の概要を示すと、次の通りである。

- インドに華人が移住しはじめたのは17世紀であり、その背景にはイギリスによるインドの植民地支配がある。インドの華人は特にコルカタの南東郊外に位置するタングラ（Tangra）に集中しており、そこでは客家が多数を占めている。コルカタの華人は特に1911年から増加し、1949年に共産党政権から逃れてきた難民が多く流入すると、一時は3万人近くに達した。しかし、1962年に中印戦争が起きると、コルカタの華人は北米やヨーロッパへと再移住していき、人口が減少した。
- インドの華人をめぐる研究が中国語で登場しはじめたのは、1960年前後である。この時期の研究は、華人人口をエスニック集団ではなく出身地で分類している。『印度華僑誌』などの例外を除いて、客家、広府人といった概念はあまりでてこない。『印度錫蘭華僑経済』によると、インドの華人人口のうち広東省籍は80%であり、そのなかで梅県が43%、四邑が30%であるという。（現在の「北側諸国」の客家観に基づくと）梅県の絶対的多数は客家であり、四邑は客家と広府人の混住地である。『印度華僑誌』によると、インドの華人は、客家、広府人、湖北人に大別されており、それぞれ皮産業、大工、歯科に従事している。
- インドの客家をめぐる民族誌的研究に初めて系統的に着手したのは、アメリカの人類学者エレン・オクスフェルドである。彼女は1980年代にコルカタで数度にわたるフィールドワークをおこない、1985年に博士論文を完成させた。その後、台湾、中国本土、インドの研究者によりコルカタの華人／客家をめぐる研究がおこなわれ、その研究範囲は信仰など多岐にわたった。そのなかで潘美玲は、自身の研究も位置づけている。
- 潘美玲は、社会学者・人類学者として2006年からコルカタでフィールドワークをはじめ、特に客家によるエスニック産業の変化や女性の役割に着目した。潘美玲によると、オクスフェルドが調査した1980年代は皮産業の最盛期であり、コルカタから北米などへ移住した要因には産業ネットワークの拡大という側面もあった。しかし、後に皮産業が衰退すると、客家は必ずしも外へ移民することはなくなり、中華レストランの経営へと向かった。同時に、中華レストランの経営を開始するためには一定の資本が必要であるため、女性を中心に美容院を経営することも顕著となった。

本稿は、コルカタの華人／客家コミュニティに主な焦点を当てレビューをしているが、国際ネットワークおよび非客家にも配慮している。例えば、Blunt 和 Bonnerjee による口

ンドン、トロントのインド華人調査だけでなく、張幸 (Zhang Xing) によるトロント、広東・肇慶市四会のインド華人調査もとりあげている。さらに、インドの湖北人社会をとりあげ、彼らの間で歯科業が流行している要因は、インドネシアの華人社会が関係していることを指摘している。

このように、本稿は、本書で唯一、先行研究のレビューを中心に据えた論考であるが、そこからインドの客家をめぐる歴史的・経済的変遷、非客家との関係、コルカタを中心とする華人ネットワークなどに関するデータも提示している。また、先行研究の考察において、インド客家研究が必ずしも地域的・民族誌的に「閉じたフィールド」のみを対象としているわけではなく、むしろグローバルな網の目のなかでコルカタを捉えてきたということが示されている。

(河合洋尚)